

編集後記 言葉は魔法の杖

高校野球甲子園大会が真っ盛りの中、原稿を書いています。
たまたま目にした優勝候補筆頭の横浜高校の準々決勝の試合。

見たのは同点の9回裏からでしたが、手に汗握る激闘に胸が熱くなりました。

その甲子園で残念だったこともあります。広島県の代表チームの大会途中での出場辞退です。
詳しいことはわかりませんが、発端は禁止されているカップ麺を食べた1年生に対する集団暴行とのこと。
事件発覚以降の、子どもを守る立場の、また指導する立場の大人たちの対応には疑問が残ります。
それに奥さんに隠れてカップラーメンやからあげクンをコソ食いしている僕は、ちと複雑。(;-_-)
最近、読んだ本「生贄探し 暴走する脳」(中野信子(著) ヤマザキマリ(著) 講談社刊)にも、
「正義感の強い人ほど残虐になりやすい」とあって、なんだか考えさせられました。(@o@)

ヨーロッパでは13世紀から18世紀までドイツを中心に民衆の「魔女狩り」が行われていました。
「魔女」とは、自分たちの意に沿わない存在。「異端」です。時に個人の怨恨を全体の「正義」と
すり替えて、異端審問官に「魔女(異端)」だと密告したものも多かったといえます。
背景には、封建体制が崩壊したことで民衆が力を得て「物が言える時代」になったことがありました。
その民衆の魔女狩りに拍車をかけたのが、異端審問官「ハインリヒ・クラメル」が書いた「魔女への鉄槌」
という一冊の本でした。折しもグーテンベルクにより実用化された活版印刷により、ヨーロッパ全土に翻訳・
出版されベストセラーとなったのです。今でいう拡散。登場した活版印刷は現代のSNSを連思させます。
この本では、**魔女と認定するには噂話さえあればよくて、拷問による自白が推奨**されています。
身勝手な「正義」の名の下、この災いの書により熾烈を極めた「魔女狩り」が燃え広がったのです。

怖いのは、魔女ではなく、自分の正義を信じ込み突き進む民衆。でもそれは僕ら誰にでも起こりうること。
現代のセクハラやパワハラの加害者にも通じるところがあるように思います。
アンガーマネジメントでは、**怒りの正体は自分の中の「～べき」**だと説いています。
怒るのは、自分が信じている「べき」が裏切られたから。でも、その「べき」を貫くことで、生活
や職場に支障をきたすことがあるようならば、その「べき」は見直したほうがよいのかもしれない。
やなせたかしさんが言うように、正義は角度を変えて見るだけで変わることもあるのです。(°^°)

冒頭の高校野球の話。強豪・横浜高校と対戦したのは、ベスト8に公立でただ一校残った県立岐阜商業でした。
ライトを守る横山選手は、生まれつき左手の人差し指から小指がありません。
その横山選手が子どものとき、よく読んでいて勇気をもらった絵本があったそうです。
「さっちゃんのまほうのて」(たばた せい いち他(著) 偕成社(刊))です。

さっちゃんには生まれつき、右手の指がありません。
通っている幼稚園での『おままごと』でのこと。お母さん役をやりたいと言った さっちゃんは、
お友達のまりちゃんに『てのないおかあさんなんて へん』と言われてしまいます。
周りにいた友達も口々に『そうよ!』『へんだよ!』と言い出して、
お父さん役のあきらくんまで、『おれ、おとうさん、やーめた』と言い出しました。
悔しくて悲しくて さっちゃんは、そのまま幼稚園をとびだして帰ってしまいました。
ある日、幼稚園を休んでいる さっちゃんに、お父さんはこんな言葉をかけました。
『こうして さちこと てをつないで あるいていると、とってもふしぎな ちからが さちこのてから
やってきて、おとうさんのからだ いっぱいになるんだ。さちこのては まるで まほうのてだね。』

言葉は、時として魔法の杖のよう。(°-°)-☆

誰かを追い詰めてしまうのも、逆に勇気を与えてくれるのも人の言葉です。

自分の「べき」と向き合いながら、元気づけられる言葉を口にできる人になりたいと思っています。



アヴェニール労務事務所 所長 柿野元博
http://www.avenir-sr.jp
E-Mail avenir4you@gmail.com

